

目の前のひとりの生まれてきて良かったを、日本の医療から

JAPAN HEART NEWS



3月28日ミャンマー大地震の発災直後、外傷患者を屋外で処置する吉岡医師



2025
SUMMER

- 01 : ミャンマー 「ミャンマー大地震」
- 02 : カンボジア 「目の前の命、そして未来へのミッション」
- 03 : ラオス 「小児がんプロジェクト初の患者さん」
- 04 : 災害支援・対策 「海外訓練と能登の継続支援」
- 05 : スマイルスマイルプロジェクト 「最期まで、前向きに」

01 ミャンマー ミャンマー大地震

震源は、内戦の衝突が激しい地帯。 外からの支援入りが躊躇されるなかでの決意

現地時間2025年3月28日12時50分、ミャンマー中部を襲ったマグニチュード7.7の大地震。クーデター以降4年以上にわたって厳しい生活を強いられてきたミャンマーの人々に、さらに追い打ちをかけるように甚大な被害をもたらしました。

ちょうど手術活動で中部のワッチェ慈善病院に入っていた最高顧問・吉岡秀人医師の「地震や」という声で電話が途絶え、その後病院近くが震源地との情報をキャッチ。安否確認のため何度も電話をかけるも全く通じず、その一方で多くの建物やザガインへ渡る橋が崩落している様子が次々とネット上に上がり悪い予感ばかりが頭をよぎります。そんな中で発災後1時間以上経って、ようやくスタッフや患者さんたちの無事が確認できました。途切れ途切れながらもようやく繋がった現地からの1本の電話の後ろでは、負傷者への手当てに追われる医療スタッフたちの声が響いていました。病院自体も被害を受けた中でできる限りの医療資材を持ち出し、屋外で負傷した近隣住民の処置を行っていました。



生活物資支援の様子

翌朝には支援チームが被災地に向けて、約600Km離れたヤンゴンを出発。現地の状況やニーズを確認しながら発災後3日目には、病棟の倒壊によって屋外に張られたテントの下で多くの負傷者の治療にあたっていた被災地域の4病院に、薬剤や手術関連物品などの緊急医療物資の支給を開始します。さらにその翌日からは、最も被害の大きいザガインでの人的支援としての医療活動をスタートさせました。

クーデター以降、軍と民主派勢力の衝突が続くザガイン地域は、治安面の不安から多くの国際団体が支援入りを躊躇する状況でしたが、私たちにとっては活動の原点でもある大切な場所です。スタッフたち自身が被災者でありながらも、「現場を一番知っている私たちがやらなければ」という強い想いで支援活動をスタートしました。



巡回診療中の医療コーディネーター河野（左）と神白医師（右）

地域の拠点病院にはアクセスできないザガイン地域の人々に、食糧及び生活物資支援と、移動診療による医療支援を開始。発災直後の食糧不足の時期にはお腹を満たすための缶詰や乾麺、その後は家屋の損壊や地震に対する恐怖から屋外で寝泊まりする人々に対するビニールシートや蚊帳を、約4,000世帯に対して配布しました。

今回の大震災を受け、カンボジアの日本人医療スタッフやかつてミャンマーでの活動に関わったOB・OGたちも駆けつけ、特に被害の大きかったサガイン市街の約20カ所での移動診療を実施しました。集落の集会所やお寺の境内、時には木陰やテントの下などで即席で診療を行うことも。このような形で発災直後からの約1カ月半の間に、約2,200名（5月17日現在）の患者さんに対する診察を実施しました。

災害直後の水道も電気も不通、気温が40度にも迫る1年のうちで1番暑い時期のミャンマーで、現場の状況に合わせて迅速かつ柔軟に緊急医療支援が実施できたのは、東南アジア諸国で医療活動を行ってきたジャパハートだったからこそかもしれません。

被災地は現在、被害のあった建物の解体や撤去が進み、そこに暮らす人々も1日も早く元の生活に戻るべく前を向こうとしています。ただ表面的には前を向いているように見えても、経済的損失や家族を亡くした喪失感を胸のうちに抱えながら生きている人も多くいるのが事実です。この国で20年活動し続けてきた団体として、これからも長期的にサポートしていきます。



巡回診療には多くの地元の方が訪れました

拠点病院の被災と現在

今回の大地震によってワッチェ慈善病院も2棟あるうちの1病棟の1階部分が押し潰される形で倒壊し、もう一つの外科病棟も天井や壁が剥がれ落ちるなどの被害を受けました。周辺の医療機関も大きな被害を受けたため、現地の医療支援ニーズはさらに高まっています。

そのため、被災後4日目よりワッチェの病院前で屋外診療を実施し、地元の人々にとって「医療に辿り着ける」安心も届けています。1日でも早い手術活動再開に向けて、5月より実地調査を行い、同月中に倒壊を免れた病棟の補修工事を開始して6月には運営再開。入院患者の受け入れを開始し、最高顧問・吉岡医師による手術活動も2カ月ぶりに実施しました。

その一方でクーデター以降のミャンマーでは、ワッチェ慈善病院の周辺だけでなく全国的な医療者不足によって医療体制が崩壊し、治療が受けられず路頭に迷っている患者さんたちが多くいます。そのため、2024年12月よりヤンゴン郊外にある慈善病院での医療活動もスタートさせると共に、各地の病院に日本人専門家を招へいし、小児がんなどの小児外科疾患・小児心臓病・口唇口蓋裂など、小児を中心とした高度専門医療の提供や人材育成にも注力してます。その活動によって専門的治療を受けた子どもの数は年間350名に上り、高度医療においても着実に前進しています。



上段：発災直後の病院
下段：5月の修繕工事

ミャンマー児童養育施設 Dream Train

「それでも勉強がしたい」の想いを叶える

2025年春、7歳から15歳までの計15名の子どもが入所しました。昨年入所した子どもたちは4月で1年を迎え、目覚ましく成長を遂げています。

エーヤワディー地方出身の12歳の男の子もその一人です。地元の学校が情勢の影響で長期閉鎖となり、通学できなくなりました。父親は三輪自転車タクシーの運転手、母親は家畜を育てて生計を立てていますが、遠方の学校への通学費用を捻出することはできません。「それでも勉強がしたい」—そんな想いを抱いているときに、Dream Trainと出会い入所しました。

入所直後は見知らぬ環境に緊張していましたが、職員や子どもたちと徐々に打ち解け、今では学校でも施設でも友人と楽しく過ごしています。

授業では英語が最も好きで、日本語も学び始めました。「勉強は大変だと感じたことがありません。新しいことを学べるのが楽しいです」と前向きな姿勢です。学校外ではサッカーに熱中し、時にはブリティッシュ・スクールの子どもたちとラグビーを楽しむこともあります。「運動は健康にとっても大切だから」と大人のような発言をして私たちを驚かせることもあります。時折、故郷の食事が恋しくなることもあるようです。

勉強はもちろん、スポーツにも全力投球



3月の大地震では、施設があるヤンゴンの被害は大きくなかったため、Dream Trainの子どもたちはいつもと変わらずに過ごすことができています。困難が重なる時代のミャンマーに生まれた彼らが、毎日健やかに生活し、夢に向かって進めるよう私たちは引き続き環境を整えていきます。

02 カンボジア 目の前の命、そして未来へのミッション

入院生活の中で育まれた夢「将来は先生になりたい」

チャーニーちゃんは、右腸骨部のユーイング肉腫と闘う14歳の女の子です。ユーイング肉腫は、主に骨に発生する悪性腫瘍で、特に長骨や骨盤周辺にできやすく、痛みや腫れ、しこりとして現れることがあります。進行すると、歩行困難や発熱など、全身に症状が及ぶこともあります。

彼女に最初に現れた症状は、左腰のしこりでした。やがて痛みやだるさが右足の先まで広がり、不安を抱えて近所のクリニックを受診します。処方された薬では改善が見られず、今もカンボジアに存在する伝統医療を試したものの、効果は感じられませんでした。3度目の受診で検査を受けた結果、悪性腫瘍の可能性があると診断され、ジャパンハートへ紹介されることに。



家族と離れ、頑張って治療を続けています



イベントの司会を務めるチャーニーちゃん

3月ごろに入院したチャーニーちゃんは、当初「家に帰りたい」と毎晩涙を流していました。にぎやかな病室でも一人で過ごすことが多く、静かな印象を受ける子でしたが、ふとした瞬間に見せる笑顔は周囲の空気をやわらげてくれました。

入院から2ヵ月ほど経ったころ、彼女の表情やふるまいに少しずつ変化が現れます。カンボジアの仏教行事の日、病院で開かれたランタン作りのイベントに参加してくれたチャーニーちゃん。かつて「先生の仕事に興味がある」と話していた彼女に、小さな子に作り方を教えてもらえるか声をかけてみると、やさしい口調で「チャー（いいよ）」と応じてくれました。言葉がまだ上手に話せない子どもにも、丁寧に寄り添う姿は、まるで本物の先生のようなでした。

そんな彼女は、沖縄の美ら海水族館のオンラインイベント後に予定されていたクイズ大会の司会役を任されることに。短い準備期間のなかでスタッフとクイズの内容を考え、当日は大役を務め、参加した子どもたちの笑顔を引き出していました。



病院での生活にも慣れ、笑顔が見られるように

現在、2週間ごとの抗がん剤治療（全14サイクル）を受けており、体調に応じた治療間隔の調整も行いながら既に4サイクルが終了しています。治療を始めてからは腰の痛みが和らいでいると、話してくれたチャーニーちゃん。今後は腫瘍を小さくしたうえで放射線治療を、さらにこれらの治療の結果を踏まえて手術も検討する予定です。

ある日、再び将来の夢を尋ねると、「クメール語の先生になりたい」と教えてくれました。学校に戻って勉強を頑張りたいという想いの背景には、入院生活での経験や出会いが影響しているのかもしれません。

小児がんの入院期間は、短くても数ヵ月、長ければ1年とさまざまです。夢を抱くチャーニーちゃんの闘病生活は、これからも続いていきます。

新病院開設まで4ヵ月—持続可能な医療のための“ミッション”

最高顧問・吉岡医師を筆頭に指導医レベルのスキルを持つ日本人医師による、数日間の集中的な手術活動—通称「ミッション」。これは、カンボジア人スタッフにとって、医療者としての知識や意識、スキルを高める貴重な機会となっています。

新病院「ジャパンハートアジア小児医療センター」の開院まで半年を切った今、ミッションを通じて病院全体の結束力がいっそう強まっています。ミッションでは、小児がん、甲状腺腫瘍、乳房腫瘍の手術を中心に行われました。5月末時点で、全体の手術件数は855件にのびりました。

小児科部長・嘉数真理子医師から最も信頼を置かれる小児病棟のシーパン医師は、ミッションについて次のように語ります。



日本人医師と現地スタッフによるミッション



カンボジア新病院 建設中の様子

「ミッションは、単なる医療支援の場ではなく、自身や現地スタッフの成長を促す重要な機会です。ミッション中は、吉岡先生の存在が精神的な支えとなり、安心して手術に臨むことができます。一方で、終了後は現地スタッフだけで対応する必要があり、限られた期間の中で『自分たちでベストを尽くす』ことが求められるのです。その挑戦をやり遂げた経験が自信となり、技術の向上にもつながっています」

新病院では、実際に開設した後の「持続性」が一つの大きなポイントになってきます。日本人医療者の派遣ありきではなく、ローカルスタッフたちだけで病院がまわる。人材育成を積み重ねることで、また新しい世代がより良い医療を届けていく—その循環を生み出すためにも、この「ミッション」を引き続き高い頻度で実施していきます。

医療の届かないところに、確かな一歩を

2009年、「医療の届かないところに医療を届ける」というジャパンハートの理念のもとに始まった出張診療は、ジャパンハートカンボジアの活動の原点であり、今なお象徴的な取り組みのひとつです。現在この活動は、診療後のフォローアップまでしっかりと追えるよう、また持続性を鑑み、地方の公立病院と連携して行うプロジェクトの形となっており、医療人材の育成や医療体制の強化にもつながる仕組みへと発展しています。

なかでも都市部から車で3時間ほどの地域にあるチャムカルー病院とクロッチュマー病院は、将来的にカンボジアの地域医療を支える中核医療機関としての役割が国内でも期待されており、特に重点的な支援を行っています。

チャムカルー病院では、手術室の拡張や麻酔技術の習得が進んでいるものの、いまだ定期的な手術体制は整っていません。そこで私たちは、病院内で技術を実践に根づかせるために、現場からのニーズと、ジャパンハートのカンボジア人スタッフが自ら指導できる内容の両面を考慮しました。その中で、鼠径（そけい）ヘルニアが最も適していると判断し、現在はこの手術に対象を絞って指導を行っています。また、これまで十分に得られなかった連携病院の現地スタッフの協力も、支援方針を丁寧に共有しながら信頼関係を築く中で、徐々に得られるようになってきました。今では出張診療に参加する連携病院のスタッフも少しずつ増え、着実な前進を感じています。

一方、クロッチュマー病院は、カンボジアの前副首相からの支援要請を直々に受けて支援が始まりました。もともとは小さな病院でしたが、病院としての機能が拡充される中で、より高度な医療技術が求められるようになってきました。ここでも、手術を病院独自で実施できるよう継続的な技術支援を行い、地域の医療の自立を後押ししています。

患者さん一人ひとりに丁寧に向き合う



03 ラオス 小児がんプロジェクト初の患者さん

経験と成果を積み上げ、より多くの命を救える未来へ前進

2024年より始動した小児がんプロジェクトでは、対象となる患者さんになかなか出会う機会がありませんでした。ピエンチャンの国立子ども病院との共同プロジェクトのため、そもそも経済的な理由で当院のような都市部の医療機関にかかれない人が多いという背景です。

しかし2025年2月、ついに生後2カ月の腎芽種の男の子のサポートが決定しました。お腹が大きく張っていることにお母さんが気づき、地元の病院を受診しましたが、そこでは治療ができず子ども病院を紹介されてやって来ました。

現在は子ども病院と日本側のパートナーである九州大学病院と共に、7月の手術に向けた治療を進めています。小児がんプロジェクトでは、サポート対象となる患者さんが一人でも多く病院まで辿り着けるよう、ラオス国内での広報活動も積極的に展開中です。



ラオス人医師に指導する伊藤病院 友田医師(右から2番目)と天王寺甲状腺えのもとクリニック 榎本医師(右から3番目)

手術においては、より高度な術中・術後の安全管理を今後の課題とし、残りのプロジェクト期間で技術移転を進めていきます。甲状腺疾患は、薬の服用によるホルモン値のコントロールなど、長期に渡り内科的治療を必要とする患者さんがたくさんいます。年齢や生活習慣病の有無も考慮する必要がある、内科医師は様々な症状、条件の患者さんに適切な診断と治療を行える知識や経験が求められます。甲状腺の専門医ではないウドムサイ県病院の内科医師にとって、さらには設備や資材が充実しているとは言えない環境で、非常に難易度の高い挑戦とも言えます。

残り1年余りのプロジェクト。着実に成果が見えてきている中で集大成として何ができるか。模索する日々は続きます。



小児がんプロジェクトでサポート中のソンサイくん

小児固形がんの治療がラオス国内で完結できるようになり、将来はそれがラオス全国の病院に広がっていくことで、今までは助からなかったであろう命が助かるようになる—そんな未来を目指しています。

ラオス北部ウドムサイ県で実施している甲状腺疾患の治療および技術移転プロジェクトは、3年間におよぶプロジェクトの終了に向け着実に成果を積み上げています。

このプロジェクトでは1年間に4回、プロジェクト全体で12回の手術活動を予定していますが、ちょうどその半ばにあたる2025年1月の手術活動を終えた時点で、なんと3年間で予定していたラオス人医師の目標執刀件数を早くも達成しました。

本人たちの強い希望のもと、今では基本的に全症例をラオス人医師が執刀し、日本の医療機関から招へいた医師は必要に応じたサポートを行う役割に変わってきています。もちろん、安全に手術を終えるための指導として一時的に交代することはありますが、大半の場面は安心して任せられるとの日本人医師たちによる評価を聞いて、私たちも自分のことのように誇らしく感じます。

なぜラオスでは甲状腺に特化？

甲状腺はからだに必要なホルモンを作り分泌する臓器で、甲状腺ホルモンはヨード(=ヨウ素)から作られるため、ヨードが不足してしまうと甲状腺の機能に影響を与えるほか、妊娠中の場合は生まれてくる子どもが先天的に甲状腺ホルモンを作る働きが弱いクレチン症を患うリスクもあります。

ヨードは海藻類に多く含まれるため、内陸国であるラオスでは多くの人々が甲状腺を患っていると考えられており、1990年代にはラオス国民の95%はヨード欠乏地域に住んでいるとの調査データも発表されました。

04 災害支援・対策 海外訓練と能登の継続支援

団体初となる海外での災害支援訓練を実施

3月に発生したミャンマー大地震など、世界の災害発生件数は過去50年間で5倍に増加していると言われており、東南アジアでも防災システムの強化が進められています。毎年雨季には国土の三分の一が水没されるとされるカンボジアでも、昨年9月に災害リスク削減のための5か年計画が発表されました。一方で、日本から海外へ支援に赴く際には、制度や文化の違いは勿論のこと、気候が異なり生活インフラが不足している慣れない環境でもパフォーマンスを発揮するための訓練が重要です。

そこで、4月26日から5月7日にかけて、団体として初となる災害ボランティアのための海外訓練を実施しました。向かったのは、カンボジアの拠点、ジャパンハートこども医療センターからさらに2時間ほど車で郊外に移動した、プレイベン州プレイクラ寺院内の小学校。日本から渡航したボランティアとカンボジア人スタッフが短期間でチームビルディングを行い、小学校周辺を被災地と見立てて学校敷地内に仮設の簡易診療所を設置のうえ、第一陣と第二陣に分けて最終的に約400名の生徒の健康診断を行いました。

海外における発災時には、先進国と異なり公的支援による避難所開設が行われないことも多く、支援チームは仮設診療所の設置や巡回によって患者にリーチすることになります。今回も、小学校内に仮設診療所を設置するための導線設計を考えるとところからスタートし、気温40度を超える暑さの中で現地スタッフの助けを借りて支援活動を実施しました。

参加者からは、「想定以上に飲料水の確保が必要であるとわかった」「多国籍チームでのコミュニケーションを学べた」等の声が聞かれ、有意義な訓練となりました。



現地スタッフの助けを借りて健康診断を実施

能登の人々に寄り添い続ける

能登半島地震から1年半が経つ現在も、2024年6月から行っている毎月のサロン活動を継続しています。輪島市・能登町の計12地区で、2025年5月までの間にご来場者数はのべ1,087名、並行して実施している仮設住宅訪問数はのべ672名となりました。人口流出で高齢化と医療過疎化がさらに進む状況において、現在は仮設住宅の居住者が公営住宅に移動するまでの間にADL（Activities of Daily Living、日常生活動作）が可能な限り維持できるよう、血圧測定や受診行動などのセルフケアを促進するための啓発に注力しています。

4月からは、地域保健師との連携のもとで理学療法士/作業療法士による訪問リハビリを行い、特に仮設住宅で独居のご高齢者を対象に、自立した生活を身体機能面からサポートする活動を開始しました。ジャパンハート災害支援チームはこれからも、生命だけでなく生活や人生に寄り添う医療支援を、被災地に届け続けるため尽力していきます。



輪島市門前地区における訪問リハビリの様子

小児がんと向き合う子どもたちの応援団

05 スマイルスマイルプロジェクト

最期まで、前向きに一

「いつか自分と同じ小児がんの子たちに寄付できる大人になりたい」

小児がんと向き合う子どもと家族の旅行にジャパンハートの医療者が付き添い、思い出づくりをお手伝いするこの活動。2024年7月に箱根旅行でこのサポートを利用した優翔くんは、当時化学療法を頑張っており、旅行中は身体の痛みや治療の副作用が強く出てしまう可能性がありました。主治医の協力のもと元気に旅行の日を迎えることができた優翔くんは、旅行後も「いつかは自分と同じ小児がんの子たちに寄付できるような大人になりたい」と前を向いていました。

12月に天国へ旅立ち数ヵ月が経った今、ご家族が優翔くんのことをたくさんの方へ知ってほしいと胸の内をお話してくださいました。

優翔が小児がん(肝芽腫)と診断されたのは2023年5月、10歳の時でした。サッカーと中学受験を両立させて頑張っていたある日の夜、泣き出すほどの腹痛に襲われ夜間病院へ行き、翌日から入院して抗がん剤治療と切除手術を経て12月には退院できました。年明けから少しずつ登校や勉強を再開したものの夜に眠れない日が増え、心身の不調が気になり始めました。

何か気分転換できないかと考えたときに医療者が同行するホテルの招待企画をネットで見つけ、応募したのがスマイルスマイルプロジェクト(以下SSP)でした。4月に入ると背中中の痛みや足の麻痺が現れ、脊椎に腫瘍があることが分かり緊急オペとなり、ちょうどその時にSSPから当選連絡を頂き、親身な言葉をかけて頂いたのを覚えています。手術の結果、脊椎などへの転移や肝臓の再発も分かり、今後の見通しについて非常に辛い宣告を受けました。そんな経緯もあり当選した企画は辞退しましたが、代わりにSSPから個別の旅行を提案頂いたので思い出作りに箱根の温泉旅行を依頼しました。



スマイルスマイルプロジェクトで箱根へ行った家族旅行

定期的な抗がん剤治療の副作用のほか、慣れない車椅子での旅行を楽しめるか不安は尽きませんでしたが、同行の看護師さんが旅先の医療機関の把握や体調に合わせた無理のない計画を立ててくれました。初日につくったガラスアートの写真立てと家族3人の写真は、今も大切な思い出として飾っています。帰宅後、「また次の旅行もスマイルスマイルプロジェクトにお願いしたいね」と楽しそうに話す姿を見て、この笑顔を沢山見られるように頑張ろうと思えました。

10月には下半身不随となり在宅医療に移行しました。二度と歩けない事実や骨転移の痛みにも耐え、12歳ながらも「これが俺の人生なんだ」と受け入れ、車椅子でもしっかりと勉強して社長になって、いつかは自分と同じ小児がんの子たちに寄付できるような大人になりたいと前向きに頑張りました。12月にはSSPからクリスマスカードが届き、最期は祖父母から少し早いお年玉をもらって間もなく、痛みから解放されて穏やかに旅立ちました。

小児がんの罹患者は少なく、闘病は孤独な戦いで、更に看取りの期間は言葉にできない辛さもありましたが、SSPなど心を寄せて下さる方々のお陰でなんとか乗り切ることができました。これからは彼が残した想いやご縁を大事に、私たちなりの形で病氣と闘う子たちを応援していけたらと思っています。

※ご家族にご許可をいただいたうえで掲載しております